

# 文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」採択 相互チュータリングによる創造的学力の育成

大学社会学部教授 鶴 飼 孝 造

このたび、社会学部の「相互啓発による創造的学力育成カリキュラム」が、文部科学省の教育GP（大学改革推進事業）に選定されました。この場をお借りして概要をご案内するとともに、皆さまにもご理解をいただきたく存じます。

## 1 創造的学力と同志社教育

近年、大学教育の質の向上が盛んに議論されていますが、専門的知識を学ぶだけでなく、実社会の中で新しい知識を自ら生み出し活用する能力、それを他者にも積極的に説明し共有する態度を育てる教育が大学に求められています。そのような知識・能力・態度の全体を私たちは「創造的学力」と定義し、その育成を目的に今回のプログラムを申請しました。

これは途方もなく大きな課題ですが、よく考えてみれば、個人としての正しい考え方を自ら求め実行する「良心教育」、自治自立を重んずる「自由主義」、異なる価値観を受け入れ学ぶ「国際主義」という、同志社の教育理念にその源流を求めることができ、あらためて130年前にこの私立大学の設立を構想

した新島襄の先見性を思います。

## 2 4年一貫して目的意識の探求を

2009年4月からの今出川統合を好機に、学生各自が4年間を通じて何を学ぶのかを常に自覚し、卒業後のキャリアへの展望をより明確にもてるようなカリキュラムを考えました。

〈導入教育〉 1年次の導入科目で、データと論証をふまえた主張型レポートの書き方や、グループでの討論の作法をしつかり学ぶとともに、互いに啓発しあえる環境をつくります。

〈基礎教育〉 2・3年次生中心の副専攻科目の中に学科横断的なプロジェクト科目を設定し、専門教育の基礎となる、資料検索、統計学、異文化理解の実践力を集中的に鍛えます。

〈創造教育〉 4年次での卒業研究を素材に、学生主体の出版物の編集、ホームページの作成、討論・報告会をおこない、卒業後にも通用するプレゼンテーション力を高めます。

以上を専門教育と並行させながら、学部共通の4年一貫したカリキュラムとして有機的にリンクさせることで創造的学力を

パワーアップし、総合的な学士課程教育を実現させます。

## 3 相互チュータリング制の導入

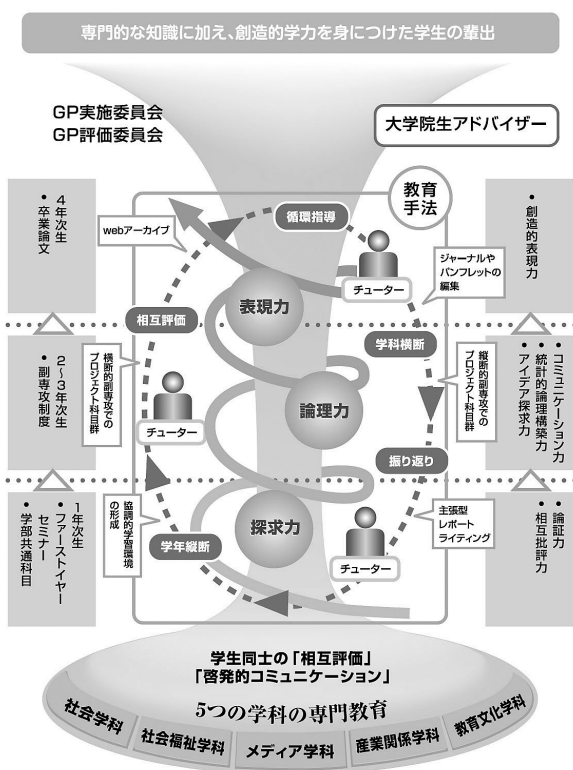
高度な学力を育成するためには、学生が相互に啓発しあい成長できる環境が重要です。この取組では、同じ学部の先輩が後輩をクラスでサポートするチュータリング制を導入します。気軽に質問し相談できる先輩がいることで教育効果を高めます。また、チュータリーに選ばれた学生諸君にも、後輩にアドバイスする立

場になることで自分の学力を深め、あるいはクラスをまとめるリーダーシップやコミュニケーション力を身につけ、人間として成長してくれることを期待しています。（なお、チュータリーには毎月の昼食代程度、あるいは数冊の書籍代程度の謝金を支給いたします。）全国的にも注目を集める試みですが、同志社生ならきつと立派にやってくれるものと信じています。

## 4 多次元的な教育評価を

教育を効果的にするために、教員から学生への成績評価、および学生から教員への授業評価だけでなく、学生間の相互評価の導入に前向きに取り組んでいきたいと思っています。自分の発表等に対する同級生や先輩後輩からのコメントは、時には教師による評価よりも大きな意味をもつでしょう。また、学生諸君はお互いに意見しあうことで、他人への言葉づかいや態度がいかに難しいものであるか、あらためて学ぶことでしよう。「他者への配慮」という人間教育を何より大切にしたいと思っています。

私たちの取組はわずか2年半の間に過ぎません。しかし、今後の様々な教育実践のためにできるだけ多くの記録やデータを残し、発表していきたいと思っています。各種のアンケート調査やチュータリーによる実践記録も、社会学部のGPホームページに逐次公開してまいりますので、皆様のご意見をお寄せくださいますよう、よろしく願っています。



# 文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」採択 『政策提案能力を養う理論と実践との交流教育』 PBL教育と京都府地域力再生活動との連携』のめざすもの

大学政策学部教授 今川 晃

## 1 課題克服にチャレンジする人材養成

少子高齢化、防災・防犯、過疎化、地球温暖化等、私たちの社会には実に多くの課題が山積しています。しかもこれらのどの課題も深刻化しつつあり、課題解決に向けてチャレンジできる人材の養成が求められているところです。政策学部では、多角的な見地から課題を発見・分析し、課題解決に向けて企画・立案し、社会の諸課題解決にチャレンジできる能力を備えた人材養成に努めているところです。

教育GPの取り組みでは、京都府内の各地域と交流して、学生が教室での授業で学んだ内容を実践の舞台で検証し、積極的に課題解決に取り組む学習ができるようにしました。

## 2 PBL教育によって学生は学習の意義を認識

学生が自らの力で課題を発見し課題解決に取りくめるように学生の一連の学習過程を支援し、自らの学習と社会との関係を意識しつつ学生のチャレンジ精神や学習意欲を高めていくのがPBL (Project Based Learning) 教育です。しかも、自治会やNPO等の地域団体、自治体職員、議員等の地域の人々と交流

し、学生の学習成果について評価（外部評価）を受けます。そのことで、設定した課題が社会にどのような意義があり、課題解決のための取り組みや政策提案が社会にどれだけ有用であるのかについて、学生自らが認識を高めることができます。

## 3 PBL教育によって教員は個別の学習指針を提供

教員は学生による課題解決を支援するために、学問上の基礎や課題発見・分析のための視点・方法を教育します。また、教員は、学生の学習過程を支援するアドバイザーとしての役割を担い、個々の学生ができるかぎり自らの力で学習していけるような力を授けていきます。さらに教員は、学生自身の自己評価、地域の人々による外部評価、学生のレポート等を判断し、学生のその後のさらなる学習や将来社会で活躍できるように学生に指針（総合評価）を提供していきます。

## 4 PBL教育と政策学部カリキュラム

基礎的な構想力や分析力を学ぶ2年次の「アカデミック・スキル」では、「高齢者福祉」、「防災・防犯」、「都市と農山村との交流」、「子育て支援」、「環境問題」、「国際交流」、「コミュニ

ティ・フアンド」等のテーマ毎に複数の授業科目を設置し、地域力再生に取り組む市民活動家と政策学部教員が連携して授業を運営していきます。また、専門的により高度な政策提案能力を養うため2年次から4年次の「演習」や「プロジェクト演習」では、いわゆるゼミ単位や合同ゼミで各地域と交流し、学習効果を高めていきます。

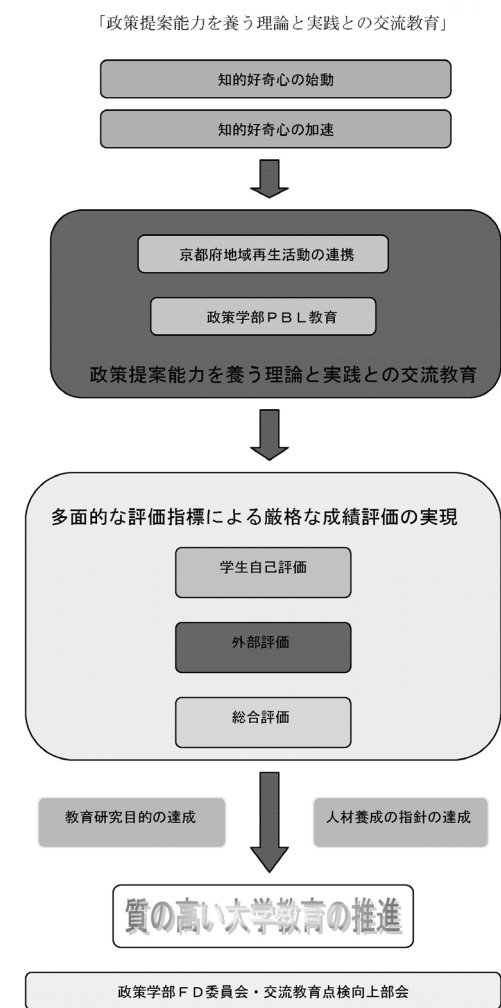
ところで、学生の説明能力、表現力を実践の場で試し社会との交流を促進するため、政策学部設置以来ホームページ上で学生の活動内容を紹介してきた「ポリスタ」に加えて、自治会やNPO等の地域団体の活動内容や分析内容を映像で発信する

「インターネットTV」を開設しますので皆さんの自宅でも学生の学習成果や地域力再生の動向を確認することができます。

## 5 PBL教育と地域貢献、地域連携

このようなPBL教育は、京都府の地域力再生プロジェクトや市町村の地域活性化活動と連携して展開していきます。これまでも、政策学部では、各ゼミ単位で国内あるいは海外の地域との交流が行われてきました。また、全国大学政策フォーラム（登録）（北海道）や全国大学まちづくり政策フォーラム（京田辺（京都府）といった全国の大学生が政策議論を行う場も政

策学部の教員が中心となつてそれぞれ毎年開催してきました。



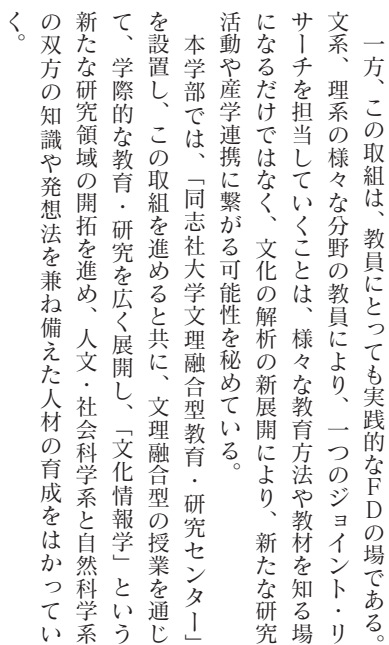
教育GPが採択され、学部全体でPBL教育のあり方等、より効果の上がる教育方法について評価する委員会（FD委員会・交流教育点検向上部会）も設けられました。教育方法をより高度化することによって、有用な人材を社会に輩出し、社会の諸課題解決に大きく貢献できる学部でありつづけたと思います。

環

数で共同して指導にあたる「文化情報学実験・演習」と「プロジェクト」である。「文化情報学実験・演習」は、従来型の実験の踏襲ではなく、教員が提供した素材に対し、学生自身が課題を設定して解決を図るものであり、「プロジェクト」は、学生自身が興味をもった文化的事象に関して、教員の指導の下に自ら設定した課題の解決を図る授業である。これらの課題設定・解決型授業では、学生がグループに分かれ共同で課題解決に取り組むことにより、協調性や社会性を養成することも目指している。2006年度、2007年度に開講した「プロジェクト」

生による授業評価アンケート調査の結果では、非常に高い評価が得られており、熱心にかつ、積極的に授業に参加し、高い満足度を得ていることが窺える。また、成績評価も、学年進行に伴い、向上しており、本学部が目指す文理融合型教育の成果を見ることが出来る。

る。リアルタイムな解決プロセスを経験させる体験型授業を展開することによって、現実体験が少ないといわれる現代の学生に対し、積極的な授業参加を促すと同時に文化的事象を取り扱う授業においても、理解度を深めていくための契機とする。また、実際にデータ取得をするにあたっての留意点・問題点も、学生がその場で現実味をもって理解することができ、さらに、分析経緯を知ることにより、学生に議論を喚起する。これらの体験をグループで行うことにより、帰属意識・責任感が強まり、役割分担しながら協調して問題解決に主体的に取り組むことが



DOSHIHA CLOSE UP



文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」採択

待ちに待った教育GP採択  
「1年間の留学を基軸にした高度総合英語教育」とは？

女子大学学芸学部国際教養学科主任 飯田 毅

## 1 はじめに

同志社女子大学として、文科省が実施している教育GP（Good Practice）に選定されることが、この数年の願いであった。今まで選定されなかった一つの原因として、本学はどちらかというと学科中心であるのに対して学部以上の単位でしか申請できなかったことがある。しかし、今回から学科単位でも申請できるようになり、本学科にもチャンスが到来した。正直、企画部から申請に関して話が合った時には、当面の課題をこなすのに精一杯で、とてもそのような余裕はないと思った。ただ、いろいろと考えていく中で、特別なことをするのではなく、本学科が実施していることをありのままに書けばいいと思い、申請する決心をした。実際、申請書を書いてみると、取組自体を書くことにはあまり苦労はしなかった。今自分たちが取り組んでいる課題、問題点、将来の計画をありのままに書けばよかったからである。本学科の取組が選定されたということは、本学科そのものが評価されたと言っても過言ではないであろう。

## 2 国際教養学科の取組の概要

ここでは本取組の概要に関して簡潔に述べたい。本学科は創立130周年を機に、本学の掲げる教育理念のうち、とりわけ「国際主義」と「リベラル・アーツ教育」を充実させるために設立された。本学科の教育目標を端的に述べるならば、「国際感覚を持った教養ある女性」の育成である。その目標を実現するため、「1年間の留学を基軸にした高度総合英語教育」という取組名称の下、特に「問題を批判的に捉え、日英両言語で論理的コミュニケーション能力を育成する」ことに取組の焦点を当てた。

国際化が進展し、さまざまな人々が交流する社会にあつては、常に種々の問題に対して批判的に捉え、世界の状況を知った上で、日本にとつてどのような解決策があるのかを考え、その解決策を論理的に日英両言語で表現できるコミュニケーション能力を持った女性の育成が求められる。本取組では、留学を通して、単に英語のコミュニケーション能力を伸ばすのではなく、母国のことを理解した上で外国のことを理解し、常にも他国と母国の複数の視点を持って、日英両言語で論理的に説得できるコ

ミュニケーション能力を持った女性の育成を目指している。

本学科の取組の特徴は以下の3点に集約できる。

- (1) ほとんどの授業を英語で行い、きめ細かな指導体制によって英語力を向上させる。
- (2) 批判的思考、国際的に通じる論理的な表現力を育成する。
- (3) 教職員が協力して、留学前および留学中の生活と学習を支援する。

英語を使って国際舞台で活躍できるようにするためには、高校までの英語の基礎の上に立って、留学前の短期間の集中訓練、留学中と留学前後の英語を学問として実際に使う体験が必要である。そのために学生一



少人数で確実に力をつける英語スキル科目の一場面

人ひとりを大切に、教員同士が共通の目標に向かって、連携しながら、きめ細かい指導体制をとっている。まず、第一に、ほとんどの科目を英語で行ない、「スキル科目」、「国際教養科目」、「演習科目」を相互に有機的に結んでいる。第二には、「国際的に通じる論理的な表現力の育成」のために、英語だけでは不十分で、母語による明解な表現技術の習得と日英両大

学で必要となるスタディ・スキルを養う。また、日本語で物事を批判的に捉える批判的思考の訓練も行う。第三に、留学前には自己に気づかせ、日本の歴史とりわけ同志社の歴史を教え、危機管理の指導を十分にしながら、研究方法・発表方法を学ばせ各自のテーマを持って留学させる。留学中は、最新のテクノロジーを駆使し、学生の生活と学習の支援を事務職員に任せるのではなく、教員が深く関わることにしている。留学前と後には、各自のテーマに関する発表会（ポスターセッション）や国際シンポジウムを実施し、日英両言語による論理的コミュニケーション能力を育成する。

## 3 おわりに

このように本取組は、留学をカリキュラムの中に位置づけ、留学前と留学中の学習の目標を明確に設定し、全員が留学の目標に到達できるように授業科目を有機的に関連させている。しかも、教職員が学生一人ひとりを把握し、さまざまな指導上の工夫を通して、細部にわたって指導していく体制は他には見られないであろう。成績管理の厳密さに加えて、留学中の単位に関しては、正規科目しか本学の科目に読み替えることはできない。そのような厳しさの中で本取組は、学生一人ひとりを大切に、父母との連絡をとりながら教員と事務職員が共通の目標を共有し、かつ行動する新しい形の大学教育の実践である。現在この取組の直接の対象となった一期生は留学先で学んでいる。我々教職員は彼女達と必要に応じて連絡を取りあっている。帰国後は、留学報告会、講演会、シンポジウム等を企画し、本取組が益々充実するよう、そして本学科の学生がより一層飛躍できるように努力したい。

文部科学省「大学教育の国際化加速プログラム（国際共同・連携支援）」採択  
「大学教育の国際化加速プログラム」採択と  
国際主義の実質化

大学国際センター国際課長 西岡 徹

## 大学教育の国際化加速プログラムとは

平成20年度大学教育の国際化加速プログラム（国際共同・連携支援（交流プログラム開発型））に、本学が申請した「外国語教育の全学的質保証と国際交流促進」が採択された。

この「国際化加速プログラム（国際共同・連携支援）」は、各大学の国際化を目指した戦略・構想に基づき、教育内容・水準の向上等、我が国の高等教育の国際競争力強化や国際的通用性等の向上を図る取組を支援するもので、今回採択された「交流プログラム開発型」は、他大学のモデルと成りうる特色ある大学間交流プログラムの開発実施を支援するものである。申請72件中13件が採択され、私立大学の採択は本学を含め3件のみであった。

## プログラム申請の背景および内容

周知のとおり、本学の教育理念は、「国際主義」「自由主義」「キリスト教主義」である。本件と関係する「国際主義」につ

請した。

具体的には、上述の多様な留学プログラムを体系的に整備し、2009年度から全学共通教養教育科目の「国際教養科目群」に位置付け、単位取得が可能な正課科目とし、現地での学習時間に応じた単位数、夏および春休みに実施といった、多様な要求に対応できるプログラム構築を目指すものである。

特に、現在国際センターが提供しているプログラムや新規のプログラムを正課科目とするにあたり、大学言語文化教育研究センターの教員が現地に赴き、実際に授業を視察した上で、現地の担当教員と評価方法等についての打ち合わせを行うなど、プログラム内容を精査し質保証を行う。また、自己主張やネゴシエーションのためのコミュニケーション、研修地の社会や文化および危機管理についての事前学習に加え、帰国後も高次の授業へと指導を行うことにより、外国語研修を「海外に行く」と言った「点」としての留学経験から、事前・事後学習を組織的体系的に提供することによって、外国語によるコミュニケーション能力の涵養のみならず、豊かな教養、異文化理解や危機管理をも含めた総合的学習としての継続的・体系的な「線」として充実した外国語研修プログラムを構築するものである。

## 本プログラムが評価される点および今後の課題について

僅か13件の採択という厳しい審査を経て採択されたわけであるが、その理由は、大規模大学における全学的な多様な言語に対する外国語学習プログラムであることは勿論、プログラム名称が示すとおり、国際化基本方針を策定する国際センター

いて自己点検・評価するならば、その現状は十分なものであるとは言い難い。そこで、2008年4月17日の総合企画会議において議論された「同志社らしい国際主義の実質化に向けて（提言・骨子）」の中で大学基準協会の相互評価時の中期目標が改めて確認され、「学生総数の約2%の在学生の海外送り出しとそれを実施するための施策の実施」が明言された。

現在大学では、長期留学プログラムとして、学術交流協定に基づく派遣留学と英語学習を主目的としたセメスター海外英語研修プログラムが存在し、短期プログラムとして、正課科目としての英語および五つの初修外国語のサマープログラムが存在する。さらに、国際センターが、正課外教育として英語、中国語、ハンガルの短期集中語学研修プログラムを提供している。こうした2種類の短期プログラムが異なった組織によって運営・提供されている現状は、幅広い選択肢の提供とも言えるが、各々の位置付けが不明瞭となっているとも言える。そこで、大学全体の外国語教育および国際教養教育の充実を目指し、短期プログラムの単位化と全学的充実を計画し、本プログラムに申

（Plan）、外国語科目の実施主体である大学言語文化教育研究センター（Do）、全学的教育効果を恒常的に点検することを任務とする大学教育開発センター（Check）、建学の精神の教育的具現化を使命とする大学全学共通教養教育センター（Action）という四つの組織が一元となることによって、PDCAサイクルによる全学的質保証体制を構築したことが高く評価されたと自負している。

本プログラムにより、2009年度からは、短期の外国語研修プログラムが更に充実し、英語関係が夏春合わせて8本、初修外国語関係が6本となると共に、セメスター海外英語研修プログラムの派遣先も3カ国となり、総勢350人以上を海外に派遣するプログラムを提供する予定である。さらに、AKP同志社留学センターおよびスタンフォード技術・革新センターが自大学の学生用に設置している科目を本学の学生が履修した場合、本学の単位を与える予定であり、留学前の準備および留学後のブラッシュアップに有用な機会を提供することになる。

以上の通り、「同志社らしい国際主義の実質化に向けて」の計画は、着々と進行している。なお、多様なプログラムの提供と並行して、財政支援をも含めた学生がより参加し易い状況の創出を目指すとともに短期の外国語研修プログラムの「線」が延長され、学術交流協定校への長期留学に結びつける施策の検討を行う予定である。

## 「第1回同志社研修・交流会」の取り組み報告

2008年7月9日に、大学新町校地の臨光館301教室にて午後3時より、学校法人同志社が主催する「第1回同志社研修・交流会」の研修会が同志社法人内5中高、大学附属小学校を中心に203人の参加者を集めて開催された。また、午後6時から引き続き開催された平安会館での交流会も140人の参加者で行われた。

今まで同志社の教職員が一堂に会する研修の場がなく、一貫教育をすすめる上で各校の連携強化を図り、共同の取り組みを発展させることが不可欠と考え、2008年初めて開催されたものがこの「同志社研修・交流会」である。ここでは、この取り組みの経過と当日の内容について報告する。

## 1 開催に至る取り組みの経過

2007年10月に、同志社7校園長懇談会から大谷實総長宛の「教育研修についての要望」が提出された。それは、全同志社の連携と協力のもと、教員の自己研鑽、研修の機会あるいは

制度を法人主導で作ってほしいという内容であった。総長からの依頼を受けて、一貫教育委員会では2008年1月「同志社教育連携部会」を立ち上げ、第1回同志社研修・交流会の開催に向けてその企画・立案・実施についての検討を開始した。ここでは、全体の研修・連携計画の内容が話し合われ、大学での職能開発、中高での連携や高大連携、あるいは学習障害をめぐる問題、免許更新制などさまざまな課題が交流された。部会の中で論点を明確にしていき、手探りの状態からだんだん内容を絞っていく作業を中心にすすめていったが、教科・テーマ別研修、授業参観などは時間的に準備が難しいと考えた。そして、第1回としては全体的に交流と研修を図ることを重視し、研修会としては全体講演と各校からの事例報告、さらに一同に会しての交流会を実施することになった。全体講演は、学校教育を専門的に研究し、現場に根ざした教育改革について多くの提言を行っている菊地栄治氏に依頼した。

## 2 研修会の内容

## ■全体講演

「ホリスティックな教育改革への招待」

菊地 栄治氏（早稲田大学 教育・総合科学学術院准教授）

## ■事例報告

## ①同志社小学校

京都の伝統工芸を学ぶ附属小学校としての大学との連携

## ②同志社香里中学・高等学校

浅野 友佳理氏（小学校教諭）  
AO入試について

## ③同志社国際中学・高等学校

清田 泰朗氏（香里中学校・高等学校 入試対策委員長）  
国際中高校の入試タイプと国際交流について

## ④同志社大学

古城 正裕氏（国際中学校・高等学校教諭）  
大学から見た学内諸学校の生徒に求めるもの

竹廣 良司氏（大学経済学部教授 一貫教育委員会幹事）

## 3 成果と課題

それぞれの校地に分かれて教育に取り組んでいる教職員が200人以上も集まり、小学校から大学まで多くの取り組みについて理解が深まったことが大きな成果と考えている。また、夜の交流会でも教科別の集まりで日頃接することの少ない教職員同士が打ち解けて話に花を咲かせ、交流の機会として非常によ

いものであったと各校の委員から意見があげられている。

日程的には校長会と協力しながら中高の教職員会議の行われる水曜日に設定したが、期末試験のあわただしい中で参加が難しい面もあり、次年度は一層の工夫が必要と考えている。事例報告として四つの学校から報告を受けたが、残りの学校については第2回の中で取り組むことになっている。同志社の一貫教育での課題を明確にしたの取り組み、教科での学校を超えた交流、あるいは教育課程、特別支援教育、特別教育活動などテーマごとの交流など、これから研修会を発展させる中で検討すべき課題は残っており、またこのような企画を継続していくことが重要だと考えている。各校の協力も一層仰ぎながら、今後の研修交流会の進展を目指していきたい。



# 同志社香里高校総合評価方式による 入学試験について

香里中学校・高校教諭 清田 泰 朗

本校の総合評価方式による入学試験は、2001年度より実施され9年目を迎えるようとしております。

以前は国語・社会・数学・理科・英語の5教科入試を行っていましたが、教職員の中では入試改革の必要性が叫ばれており、当時の入試検討委員会にて検討を重ね「それぞれの中学校にて勉学をはじめ、クラブ活動、生徒会活動などで活躍している生徒・また各種検定などの資格を持つ総合的にバランスのとれた生徒を獲得したい」との結論を得ました。

当初は本校教員が手分けをして、京阪神を中心に約200校の中学校を訪問し、この新しい制度について時間をかけて説明し、意欲のある生徒さんに受験していただくようお願いしました。本当にこのような入試制度で募集に応じてもらえるのか心配しましたが、時を重ねるにつれ理解をいただき、リーダーシップをとることができる活発な生徒が多く入学しています。

## 入試制度について

制度の内容については、次に2009年度の入試説明会資料の一部を載せておきます。

総点で満点を140点とし、中学3年の成績（個人報告書に記載される9教科の評定）を各教科10点満点、中学2年以上の特別活動の記録を15点満点、中学2年以上の生徒会活動を10点満点とします。

ここまですが学業面をはじめ、その生徒が中学校でどれだけがんばって活躍したかを評価するものであり、それ以外にも各種検定（英検・数検・漢検）を10点満点、自己推薦（AO入試的な部分で本人の持っているいいところをアピールしてもらう）を5点満点とし、入試当日の作文の10点を加え選抜しております。

当初は、各種検定を5点満点で実施していましたが、追跡

調査の結果をふまえ、2007年度よりこの部分の満点を10点に変更しました。

入試結果推移については、2007年度の専願の合格最低点は、男子で96点、女子で90点（併願は志願者なし）、2008

年度の専願の合格最低点は、男子で95点、女子で93点、併願では107点でした。

今後も、豊かな個性や可能性を持つ生徒を獲得するために、改善を加えていきたいと考えております。

## 2009年度入試説明会資料

### 1. 試験日・試験科目(身体検査はありません。)

|          |                 |        |
|----------|-----------------|--------|
|          | 9:20～10:20(60分) | 10:50～ |
| 2月10日(火) | 作文              | 面接     |

### 2. 選 抜 方 法

- (1) 本校で実施する入学試験(作文・面接)および提出書類で決定します。
- (2) 専願・併願の区別があります。(合格基準点に差異があります。)
- (3) 男子・女子の区別があります。(合格基準点に差異があります。)

### 3. 選 抜 基 準

試験当日に実施いたします「作文」および「面接」と、個人報告書の教科評定および特別活動等を考慮し、総合評価方式による入学試験を実施いたします。その選抜基準については、下記をご参考ください。

#### (1) 満点 140点

個人報告書に記載される9教科の評定(10段階) 90点  
特別活動 15点 生徒会活動 10点 検定 10点  
自己推薦 5点 作文 10点

#### (2) 個人報告書の9教科の評定について

##### ① 10段階相対評価校

次の定められた比率により10段階で記入してください。

| 段階 | 10 | 9  | 8  | 7   | 6   | 5   | 4   | 3  | 2  | 1  |
|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 比率 | 3% | 4% | 9% | 15% | 19% | 19% | 15% | 9% | 4% | 3% |

##### ② 5段階絶対評価校 5段階絶対評価のまま記入してください。

#### (3) 特別活動について

中学2年生以上の特別活動の記録を記入してください。中体連・協会もしくはこれに準ずる関係団体が主催するスポーツ活動(団体・個人)および文化・芸術活動も含みます。ただし、地区以上の大会で、表彰状等で証明できるものを対象とし、府県選抜・代表、金賞・銀賞等もこれに準じます。(大阪市、京都市、神戸市の場合は市大会以上も含みます。)

【例】バスケットボール北河内地区大会 優勝・近畿中学バレーボール大会 第3位・サッカー関西選抜(代表)・

全国吹奏楽大会 準優勝・全国合唱コンクール 金賞

#### (4) 生徒会活動について 中学2年生以上の生徒会活動をさす。

【例】生徒会会長(生徒会活動)・学級委員長(学級活動)・  
クラブ部長(クラブ活動)

#### (5) 検定について

下記の検定で、認定機関の3級以上の証明書があるもの。

日本英語検定・数学検定・漢字検定

#### (6) 自己推薦について 「(3) 特別活動」以外の活動で、証明できるものがあれば提出すること。

また、保護者または、兄弟・姉妹が本校卒業・在学中の者については若干考慮します。

【例】ボランティア活動・一芸・資格・ボーイスカウト活動・  
キリスト教会活動

# 京都の伝統工芸を学ぶ ～附属小学校としての大学との連携～

小学校教諭 浅野友佳理

## 1 「道草」から芽生える「意欲」

本校は2006年4月に開校して2009年4月、4年目を迎える。同志社小学校では「良心の涵養」「自治自立精神の形成」「国際人の育成」を教育理念とし、同志社精神を継承して良心を手腕に国際舞台で活躍できる、知育・徳育・体育のバランスのとれた人材の育成を目指している。

学力が培われていく様子は、樹木の生長に似ている。土中から栄養分を吸収して丈夫な根っこが育ち、その上に太い幹がすくすくと伸び、よく繁った葉が太陽の恵みを受けて光合成を起こし、さらに木の生長を促すことができる。この「根っこ」の教育に力を注ぐと同時に、子どもたちが多様な体験を通して、チャレンジする心や問題解決能力を養えるよう「道草」教育を重視している。「道草」を楽しみながら、「学ぶことは楽しい」という意欲を子どもたちが抱いてくれることを願っている。

## 2 同志社大学プロジェクト科目の学生との出会い

歴史ある建造物や産業・文化などが溢れる「京都」という恵まれた土地で生活を送っているものの、実際にどれだけのことを知り、触れているかといえば、他府県の子どもとそんなに変わらないくらいの知識や経験しかないことが伺える。そこでいかに地域に根ざした学習をしていくかが課題となった。

地域の発展に尽くしている方々の働きを理解するために、子どもたちが実物に触れるきっかけとなるものがあればと切望していた時に、同志社大学プロジェクト科目の学生による「子どもたちのための『京都職場図鑑』作成プロジェクト」の話を受けた。「京都の誇りを子どもたちに伝えたい」というコンセプトを基本に大学の授業の中で「京都図鑑」を実際に作成する経緯を聞いた。大学の附属小学校という流れを受けて、できる限り互いの立場をうまく尊重しあえる関係を築き、附属であることをう

まく活用していきたいと願うようになった。

学生により作成された「京都職場図鑑」を小学校で活用するために、何度も打ち合わせを行った。この1冊の副読本をきっかけに、左のような流れで活動を進めた。

### ① 図鑑の概要

学生による図鑑の概要説明。図鑑作成において小学生にあった内容であるかどうか、色彩や写真の選び方、内容の厳選などを行う。

### ② 授業における図鑑の活用

図鑑の完成と共に、実際に子どもたちが図鑑をどのように活用していくかを話し合う。

### ③ 学生による授業

図鑑の一部を取り上げ、京都の文化に触れるための導入とする。児童の興味や関心を喚起する。

### ④ 体験学習

その後、図鑑に載っている方に、実際にお会いして体験学習を行い、「本物」に触れる。

### ⑤ 発展学習

教わったことや学んだことを受けて、実際にお茶会等の催しに参加する。実物に触れる。

### ⑥ まとめ

興味をもったことをまとめ、さらに自分が調べたいこと、関心をもったことに気がつき、次年度につなげる。

## 3 成果と課題

1学期の時点で、副読本作成のために学生の方々が、職人のみなさんに取材をしてくださっていたからこそ、本校卒業生である茶道の金澤先生に作法を学び、本物のお茶会にも出席することができた。一つひとつがうまく繋がって、児童の実体験に結びついたことを心から嬉しく思う。

実際にお茶会に出席した児童は、学生による授業や茶道体験を受けて、お茶室の中にある一つひとつに大変興味深く見入っていた。進んで質問をしたり、触れてみたいすることで、主体的に調べてみたいと思うことができた。

今回は縁があつて、本物に触れる多くの機会を得ることができたが、単発的に機会を与えられ主体的に系統立てて活動できなかったことが反省点である。また、実際に興味はもつたものの、自分たちの力で取材にいく時間が十分に確保できなかった。資料の十分な活用、および大学との関わりを強めながら、子どもたちにとってよりよい活動ができるように、大学側とも連携をとり、お互いに有意義な教育活動を展開していくことができたらと願う。

数年後には、小学校の地に中学校も移転してくる。同一法人内ならではの教育方法をうまく活用していきたいと考えている。今の時点では、まだまだ模索しているのが現状だが、これから数年間で系統づけることができればと思う。一つの教育方針も様々な角度から検討されることで、長所や短所が導き出される。より多くの方法の中から、子どもたちにとってよりよい学習方法を知り、伝えていきたいと心から思う。